



Title	Japanese Ellipsis and Discourse Coherence : A Minimalist Reanalysis under Free-Transfer [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	田辺, 智也
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16535号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95712
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	TANABE_Tomoya_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：田辺 智也

学位論文題名

Japanese Ellipsis and Discourse Coherence:
A Minimalist Reanalysis under Free-Transfer
(日本語の省略現象と談話の一貫性：
自由転送システムにおける極小主義的再分析)

本研究は、自然言語における省略に関わる言語機能の仕組みを明らかにすることを試みる理論言語学研究である。生成文法では、その初期から、日本語における音形を持たない述語の項（空項；例えば（１）の[e]₁）や同じく音形を持たない付加詞的要素（空付加詞；例えば（１）の[e]₂）の理論的位置付けについて、議論が盛んに行われてきた。（１）において二節目では、直前の節で表現されている目的語の「車を」と副詞の「ていねいに」が省略されているが、問題なく解釈に含まれることが知られている。

（１）けんは、車をていねいに洗ったけど、みさきは、[e]₁ [e]₂ 洗わなかった。

これまで、このような空項や空付加詞に関して多くの統語論的分析が提案されており、統語理論に対して重要な示唆を与えてきた。しかし、統語論において仮定すべきは「自由な併合操作」のみであるという徹底した（理論的）極小主義の追求により、極小モデルの誕生以前には妥当であった統語的分析の多くは、その再検討を余儀なくされている。

このような背景を踏まえ、本研究は、省略現象のより精緻な談話分析の重要性を再確認し、**Question Under Discussion**（談話上議題となっていること）を用いた語用論的枠組みで以下の省略の談話的条件を提案する。

（２）省略の談話条件：ある一貫した談話において背景にある要素 XP は省略可能である。

本提案を元に、本研究ではまず日本語の空項の統語論に関して、**pro**（空代名詞）分析、動詞残留型動詞句省略分析、項省略分析、それぞれの妥当性を議論する。先行研究で不可解であり問題とされてきた空項に関する解釈事実の一部が上記の「省略の談話条件」によって説明されることを示す。一例として、（３）において空項 [e] を含む二節目では、項省略で派生できるはずの論理演算子 **or** が否定よりも広い作用域を取る解釈、**or > NEG** 解釈が得られないと言われてきた。

（３）けんは、スペイン語かフランス語を話すけど、みさきは、[e] 話さない。（***or > NEG**, **NEG > or**）

しかし、（４）は談話の一貫性を担保するような適切な **Question Under Discussion** が設定されると、当該の解釈が得られることを示す。すなわち、（４Q）に対して **or > NEG** 解釈は適切な答えを与えているという意味で（４）の談話は一貫しているので（２）が満たされており、省略が認可されると考えられる。

（４）Q：みさきは、スペイン語かフランス語を話さないの？ A：みさきは、[e] 話さないよ。
(**or > NEG**, ***NEG > or**)

一方で、（５）のような **Question Under Discussion** が設定されると、反対の否定が **or** よりも広い作用域を取る解釈、**NEG > or** 解釈が得られることがわかる。ここでは、（４）と対照的に **NEG > or** 解釈が **Question Under Discussion** に対して適切な答えを与えていることに着目されたい。

（５）Q：みさきは、スペイン語かフランス語を話すの？ A：みさきは、[e] 話さないよ。
(***or > NEG**, **NEG > or**)

この新たな談話・語用論的な知見は空項の統語論に関して、*pro*（空代名詞）分析や動詞残留型動詞句省略分析ではなく、項省略分析が経験的に優位であることを支持する。まず、論理演算子を含む解釈は一般的に *pro* では派生されない。また、（４）のように否定よりも広い作用域を取る *or* を含む目的語は動詞句省略の領域から移動しなければならず、項省略による分析のみが妥当であると言える。また、他方では不可解な空項の振る舞いに関して、項省略の統語的な制約が詳細に検討されてきた。しかし、本研究の分析は項省略の統語論が非常に単純明快であり、（２）の条件を満たす限りにおいて、統語的仕組みは項省略の適用をなんら制限しないことを示唆する。

本研究では次に、（２）の条件を考慮に入れた分析を、空付加詞のデータにも拡張することを試みる。日本語の空付加詞は、空項と比較してもさらに不可解な解釈上の振る舞いを示すことが知られているが、空付加詞のデータに関しても、（２）に基づく本分析により説明が可能であることを示す。例えば、（６）のような例において二節目は、副詞を含む解釈を許さないと報告されており、付加詞省略が存在しない証拠とされてきた。

（６）ゆきは、ていねいに車を洗ったけど、まもるは、[e] 皿を拭かなかった。

しかし、空項の場合と同じく、談話の一貫性を担保するような **Question Under Discussion** を設定した

（７）では明らかに副詞の省略が可能である。よって、付加詞に関してもやはり（２）の談話条件を満たす場合省略が可能であることがわかる。

（７）Q：まもるが、ていねいにしなかったことは何ですか？A：まもるは、[e] 皿を拭かなかった。

これを踏まえ、本研究ではさらに、空付加詞に関しても、その派生の背後にある統語論的な仕組みを詳細に議論する。一方では、見かけ上の空付加詞は実際には“空動詞句”であるとする動詞残留型動詞句省略分析が支持されている。他方では、空付加詞は付加詞自体を省略操作の対象とした付加詞省略分析が提案されている。本研究では、後者の付加詞省略分析の経験的妥当性を支持する証拠を提出する。一例として（８）において、副詞句「親のために」の省略が可能である。

（８）和也は、今年親のために一円も使わなかった。大金持ちになった後でも [e] 一円も使わなかった。

動詞句省略では、顕在的な否定極性表現「一円も」が動詞句から、否定の作用域の外へ移動しなければならず、移動した否定極性表現は統語的に認可されないことを誤って予測する。したがって、（８）における空付加詞は付加詞省略により派生されるという分析を支持する。

最後に、日本語における項省略と付加詞省略の統語論をより詳細に議論し、どちらも転送された項/付加詞ごとに適用される **PF** 削除により派生すると提案する。より具体的には、 Φ 素性の一致という仕組みを欠いている日本語タイプの言語では、項および付加詞の転送が合法的であることから両者の省略が統語的にも認可されると主張する。この転送に基づく分析は、日本語タイプの言語と英語タイプの言語において、統語論が省略認可に果たす役割が異なっていることに関しても有益な示唆を与える。すなわち、前者では統語論は省略を比較的自由に認可するのに対して、後者では先行研究で古くから提案されてきたように、機能範疇である主辞（**functional head**）に関連する統語的制約が省略認可にも深く関わると言える。

本研究の成果は、省略の認可に関わる統語・意味/語用論のインターフェースに関して、これまで暗黙に仮定されてきた、以下の重要性を改めて明確に示した。すなわち省略とは、統語上の原理が、ある要素の省略を許すことに加えて、当該の要素の音声的弱화가情報構造上自然であり、談話上、意味の復元が可能である場合に認可されるという事実である。また本研究は、統語理論の構築に際して言語現象を研究するにあたっては、統語部門とこれが必然的に接している他の部門、すなわち意味解釈部門、音韻解釈部門との相互作用を注意深く検討しながら研究を進めることの重要性を、経験的事実に基づき丹念に示した点も、重要な貢献である。

（2999 字）